

【第127号 二〇一五年 7月 五日発行】

福音の園だより

平成十八年度「高齢者雇用優良事業所 協会会長賞」受賞

TBSラジオ『メイのいきいきモーニング』取材放送

グループホーム・デイサービス介護保険事業者指定

350-0016 埼玉県川越市木野目一八七八番地

特定非営利活動法人 福音の園・埼玉 事務局

☎049-230-1111 (FAX)230-1112

福音の園® Gospelgarden®は有限会社シヤロンの商標

理念・方針説明

ご家族関係者の声

お願い 延命治療はつなぐドクトル

自分で飲んだり 食べたり できないならば、無理に口に入れないこと。鼻チューブ、のどの切開、胃ろう、人工呼吸器をしないこと。その他

延命治療はあるのでしょうか、私は、分かりませんので、延命と呼ばれる治療はやめて下さるようお願いします。



但し、苦痛を感じているようなら、モルヒネなどの痛みを和らげるケアはお願いします。

私の命を延ばそうと力を尽くして下さることは、感謝しますが、私は夫を寝たきりで介護して、末期を看取りながら、又、自分が年に関係なく身体が不自由になった時を考えて、無理に生かすのは、周りの愛のゆえとは言え、自己満足ではないかと思わされています。

私はクリスチャンですので、死後のことを心配し

ていません。自然にと思っています。地上の苦しみより解放されたいと願っています。私は冷静な意思のもとに書きました。家族にも話し、お願いしています。

2014年7月29日 ○○○子 印

1941.12.14 生れ。

延命治療をしないで下さい。下記の文を読んで下さい。『三、事例報告：八七歳の老親を看取って』

（2014年）先月の9/14（日）の夜、田舎の母八七歳が召されました。デイサービスを利用し、またショートステイを利用して「介護サービス」フル活用していた。やがて、施設入所となった。2年8ヶ月施設でお世話になった。（中略）。従姉妹とこで正看護師の心強い受け入れ体制もあって、息を引き取る5日前に施設退所し、自宅へ帰りました。床ずれ防止のエアマットを敷いた座敷・畳間で過ごしました。最初の1日目は水分補給や栄養補給を口から摂りましたが、2日目からはほとんど受け付けませんでした。4日目の9/13（土）、往診下さった在宅診療のドクターに妻が尋ねました。「あとどれ位の寿命でしょうか？」「オシッコが出なくなってから48時間が目安でしょうか！」と回答下さいました。その診たて通りに、翌日の5日日夜、弟が様子を見たら息をしていなかった。

夜10時30分過ぎだったが、すぐにドクターへ連絡。深夜 往診下さり、



「老衰」と死亡診断下さったのでした。（中略）。私も妻も、既に13人の方々をホームで看取ってきた。積み重ねてきた体験から、私共の心は穏やかに「母の最期」を受け留めることができました。

【最期の瞬間を自宅で迎えることができました。その為在宅酸素のチューブやマスクもしなければ、点滴もしなかつた。それによって、本人にとって最も負担のな

い数日間であつた」という事実です。（中略）。

医療では、食べられなくなつてからでも様々な治療が続けられ、病人は風に逆らうように死んでいる。

私たちは、本人の為に思つて、家族は苦しまないように「良かれ」とばかりに、チューブで酸素を送る。

元気になつて欲しいからと栄養剤の点滴を施す。その為、体内の各臓器はかえつて負担を強いられる。まだ若くて働き盛りの人ならいざ知らず、最期を待つ高齢者にとっては逆効果になると云う現実。

体内の各臓器は、最期に向かつて準備している。在宅診療のドクター見解の通り、「48時間」のタイムリミットを迎える。



私の母はそのような最期だった。ですから、「まあ何て気の毒な、こんなにやせ細つて…」と嘆かなくても良い。やせ細つて、全身 皮と骨だけになつて当たり前。「冬が近づき、木の葉が落ちるようにして、その一生を閉じる」とは、正にこのような姿だったのです。

各臓器が最期に向かつて静かに準備しているのに、やれ酸素だ、点滴だ！ となる。最期に向かつている肉体から見たら、要らぬお節介「迷惑千万」。横たわるベッドが「人型」の形でビッシヨリと濡れてしまうと云われます。汗でも失禁でもない。皮膚呼吸を行なう全身の毛穴から余分な水分を吐き出そうとする生理代謝。それだけ心臓に負担が掛かり、辛い表情となり、全身のむくみ（浮腫）となつてしまふ。（中略）。

○○○子 印

【解説】「自筆 お願い文書」作成後、十月に行なつた私の福祉講演会文書を読まれ、一部をコピーし「自筆文書に添付」されたのでした。

届いた写し(へ)内は(こ)本人加筆)をご了解の上掲載させていただきます。